

「水理実験センター」という名称について

初代センター長 井口正男



「水理実験センター報告」の第1号の「発刊にあたって」にも書いたように、センターの建設の仕事に追われて多忙ではあっても、とにかく出版物を出すことにしようということで発足したこの「水理実験センター報告」が10号を数えることになったこの機会に何かについて書くとするれば、私はためらうことなく「水理実験センター」という名称をとりあげたい。名称そのものではなく、それが用いられるようになったいきさつについてである。

筑波新大学創設準備で、現在の水理実験センターのようなものを新設しようということが認められたのは昭和48年ころのことであつたらうか？当時、準備会の委員であつた尾留川^{びるかわ}（正平教授、故人）先生のお骨折りによると同時に、東京教育大学地理学教室の自然関係3講座（地形・気候・水文）では水路実験や水・熱収支に関する実験の必要性に迫られていることが学内で広く認識されていたものと思う。“筑波の新しい大学で実験施設をつくるとしたらどんなものが欲しいか、考えてみてくれないか”という尾留川先生の呼びかけが出発点であつた。当時の尾留川先生は準備会関係の重要なお仕事で多忙を極め（—これが先生の死期を早めたのだと思う—）、この呼びかけに関連して、いくばくかの時間ですら割いてもらうことはできない相談であつた。いわば雲をつかむような話で、今から考えてみれば、ああすればよかった、こうすればうまくいった筈だと思ふことは多いのであるが、とにかく当時の教育大地理教室関係の若いスタッフに相談したり手伝ってもらって準備を進めることになった。準備のための会合は

昭和49年の冬から春へかけてかなり頻繁に開かれ、昭和50年度の概算要求として提出されたのであるが、この過程で「水理実験センター」という名称がつけられたのである。

しかし、その名称はわれわれがつけたのではないのである。われわれの会合で検討した結果は、この実験施設は水理と水・熱収支の2つの実験部門からなるような内容の要求をすることになった。いよいよ予算請求の段階になって、“このセンターの名称が必要になった。一般に通りやすい（つまり大蔵省へ説明しやすくという意味だと私は思った）ように「水理実験センター」と仮にしておく。近いうちに本式の予算請求をするから、それまでに実状に近い名前を考えておいてほしい”と尾留川先生から言われた。そこでわれわれは環境理学実験センターという名前を考え、英語名を Environmental Research Center と決めたのである。しばらくして名称を変更しようとしたところ、すでに「水理実験センター」で予算折衝が進んでいるので、この予算が一段落するまでは名称変更は不可という返事がかえってきた。恐らく準備会と文部省のどこかで話の行き違いがあつたのだと思う。

英語名は予算折衝に直接関係しないのでそのまま採用されて現在に至っている。センター発足当初は、日本名と英語名が一致しないのはどうしたことかとよく尋ねられたが、それにはこのようないきさつがあつたのである。